巻頭言

国際教養学部長　　郡　伸哉

教養部を前身として2008年度に装いを新たに出発した国際教養学部は、2012年３月に完成年度を終えた。これを契機に、2011年度中には学部固有科目および全学共通科目のカリキュラム改正を決定し、2012年４月から新カリキュラムを施行している。2012年度は、2011年度に検討し残した問題の検討のほかは、カリキュラムに関する大きな議論をすることはなかったが、学部にとってひとつの節目の年であったことはたしかである。

2013年度は、大学基準協会に提出する自己点検・評価報告書を仕上げることになる。その過程で、学部の教育内容と組織運営の現状と将来について考えることが求められるだろう。さらに、学園理事会による長期計画NEXT10の構想が2012年度に立てられ、2013年度からは、その実行に向けた活動が始まる。こうした状況のもと、国際教養学部も大学全体の動きとのかかわりのなかで自らのあり方を考えていくことが必要となってくる。

国際教養学部の立ち位置の独自性、それは、全学部に開いている全学共通科目と、国際教養学部にのみ開いている学部固有科目の両方を担当し、さらに全学の教職科目も担当するという点にある。そのことが学部運営の円滑さを妨げる面がないとは言えない。そのデメリットをどう減じるかをつねに考えなければならないが、同時に、そこからどのようなメリットを引きだせるかも考えなければならない。

国際教養学部は、全学共通科目の運営については長い経験をもち、学部固有科目に関しても、いまではそれなりの教育実践の経験をもっている。それぞれについて、今後も改善を重ねて取り組んでいくべきことは言うまでもないが、その一方で、それらのあいだにどのようなつながりを見出すのかも問われねばならない。全学共通科目を通してすべての学部学生の教養の養成に携わりつつ、学部専門教育においてもまた教養を重視していること、言いかえれば、異なる二つのものが「教養」という言葉を通してつながっていること、そこにどのような意味が与えられるのか。それは、「教養」という言葉自体と同じく、特定の意味に固定されることを拒む性質のものであろう。しかしそれだからこそ、その問をもちつづけることが国際教養学部の将来を考えていくうえでの推力になることも間違いないだろう。

本書の第Ⅰ部に記録を掲載した経験交流会（テーマ：「多人数講義における学生の満足度を高める工夫」）は、国際教養学部がまさに上述した立ち位置から大学全体を巻きこんで議論を呼びかけられるような内容のものであった。教育事業推進委員会が例年企画している講演会については、2012年度中には開催が間に合わなかったが、講演会やそれに代わる企画に向けて検討がなされている。なお、これとは別に国際教養学部では、各分野の教員が毎年、それぞれの観点から適切な講師を招き、多数の講演会を催している。2012年度は、哲学、政治、環境、英語教育、天文など、さまざまな分野の有意義な講演会が開催された。それらの記録をここに載せられないのは残念であるが、こうした活動にも、この学部の立ち位置がよい意味で反映していることを付け加えておきたい。